

福井縣物産誌（明治 35 年 河田貫三編輯）

一部旧字体は新字体に変更しております

第三期 羽二重創始時代

明治十八冬織工會社に於てはハンカチーフの品位の改良計畫中小林清作支店の需により米國輸出向の羽二重絹製造を志したるに恰も好し村野文次郎は製糸業取調用を以て群馬縣下へ出張中に付右羽二重教師を該縣下より聘用したき旨を照會す困て同人を知人桐生町森山芳年に依頼し同人の織工生徒一名派遣の儀を豫約し同十二月歸縣せしが廿年一月本縣第一部長遠藤謹助織工會社の議を贊助し各機業者を縣廳へ召集し大に製絹改良の必要を説き且村野の斡旋に依り教師をも得らるるに至れり宜く速に其手續きをなすへき旨を諭す爰に於て同業有志の者亦漸く傳習の志を起し村野を以て直に桐生森山芳年に書簡を送り教師派遣を依頼せしむ同年三月森山の職工高力直寛なる者來福す爰に於て織工會社を仮に傳習所となし各機業者集合して高力に依り羽二重製法を学ぶを得たるを以て漸次之を擴張し日に月に其産額の増加するに至りぬ之れ羽二重業の起源とす

同年夏竹谷彦平の奉書紬販路先より甲斐絹の注文を受け同人之を製織せしに品位需要に適するを以て之を注文する向増加し越前改絹の名稱を付して三宅丞四郎、米岡藤市、山口喜平等一時専ら該絹を製出せり然れども翌秋に至り羽二重の氣配好きによつて之を中止し羽二重製造に遷れり同年十二月足羽吉田兩郡織物外三品共進會を開く福井より出品したる織物百七拾八点出品人八拾九名にして織工會社は紋織ハンカチーフに於て一等賞を得たり同年同月故酒井功の機織上に與へたる功績を追賞し其相續人酒井静雄に縣廳より三組木盃を付与す

是より先明治十九年七月葛巻包蓐は曩に粗製濫造の矯正策を講じたれども其功擧らざりしを以て明治十七年農商務省より令達せられたる同業組合準則により組合を組織するに如かずと思ひ當時の足羽吉田郡長柘植善吾本縣第二課長本多鼎介に謀る諸氏皆賛し此に同業組合組織の議なりぬ役員を定め規約を編纂し縣廳の許可を受け葛巻包蓐組長となる時に人員纔に八名機数參拾六台なり事務所を仮に葛巻包蓐の宅に設け日進織工組合と稱せり當時製織せし織物中ハンカチーフ最も多額を産出せり同二十年一月組合會議を開き規約修正委員を選擧し修正案成を告て同月廿八日修正規約認可願を出し同三十一日認可せらる二月役員を改選し葛巻包蓐組長に再選せらる同月組合を五部に分ち每部五名の常議員を置き機敏を查了し織工鑑札を配布す又ハンカチーフを検査し松竹梅の符号を糊張し品位を三等に區別す

従來福井産絹織物の販売は主として織工會社の一業務として社員之を東京大坂等に持運び販売を試みたれども十九年に至り羽二重の産額大に増加し販路の擴張に迫られたれば小林清作之を織工會社に議り二十年中の製品は専ら同店にて

之を売捌き東京横濱等に販路を開けり同年十月生糸商小川喜三郎羽二重の未だ海外の販路を開きし者無きを遺憾とし自ら見本若干を携へて横濱に至り百方輸出の途を謀る然れども當時産出額甚だ僅少にして到底輸出品となすの価値なきを以て商議纏まらず空しく帰途に就しと途次京都に入り大野貿易商店に就きて謀るに希望の在る所を以てし商議始めて整い見本として羽二重三百疋（十二丈物）を送る事を約す然れども當時未だ機業家の僅少なると職工の未熟なるとを以て製造容易に其数に達せず加ふるに更に三百疋の増注文を受け頗る困迫すと雖も自ら刻苦奮励して原料を自由に機業者に貸与し百方彼等を鼓舞奨励し約定期限内に其全数を輸送せり此年三月生糸商坪田孫助は前年製出せし所の羽二重二百疋を自ら横濱に齎し十番外商に売込み好評を博す

明治廿一年頃迄は従来ハンカチーフ並びに羽二重の製織は甲斐絹製に類し前練糸を以て製造し且生糸其儘に糊附を施し織立たるを以て製造上困難なるのみならず自ら光沢軟性を欠き且製造し上げたる品の売買上収支償はず其今日の如き完全なる糊附法を傳授したるは高力直寛なりと云う又後練法を研究したるは坪田孫助なりと云う今其由来を記さんに明治廿一年上州に絹織物業者にて経験家の聞へある星野傳七郎當時石川縣小松の機業家新田甚三右衛門の織物顧問として聘せられたるが偶々生糸買込のため坪田孫助が家に来ることあるに際し同人は留めて羽二重製造の事を研究し且つ福井の斯業に志ある者に紹介し研究を勧誘し且自ら後練に依るの法を百方研究して後自家の製造にかかる羽二重若干を再び横濱十番外商に齎し売込たるに愈好評を得たり其れより福井に於ては製造者輩出し爾来産額も日に加はるに従ひ又販路の一点が問題となれり然れども未だ横濱に一売店の開設を要する程にも達せず横濱より客の買込に来るほどにも至らざれば坪田孫助は福井の重なる製造者三宅山口等に謀りたる結果同人次男源太郎を横濱小嶋源次郎なるものに托し留らしめ同人をして福井始め縣下の羽二重を一手に販売せしめたり是等は羽二重輸出の濫觴にして最も記憶すべき事実なり。

明治二十一年の頃迄は福井に練白業を営む者なく始めは上田伊八に托し京都金山練工場よに練工を施したり偶々福井に於て是を試みたる者ありと雖も単にに従来の染業者に托して練白せしめたるものなれば固より不完全を極めたり村野文次郎小川喜三郎葛巻包蕎等常に之を憂ひ福井市勝見なる染業家渡邊清七なる著を撰んで桐生に遺し練白の業を習はしめ漸く完全なる練白者を得たり同年本縣農商課よりの達しにより組合名稱を改め福井絹織物同業組合と稱し規約を更正し同月三十一日更正規約認可を受く富田循良是が組長たり。

明治二十二年頃迄は綜統は全く絹糸を用ひたるが故に価格高貴品質脆弱にして機業家常に其不経済を嘆せしが三宅丞四郎カタン糸を以て綜統製造の法を發明したり明治二十一年九月富田知剛箴工加藤常三郎を件ひ石川縣下小松に至り新

田甚三右衛門の織物揚を親察し同場教師星野傳七郎に依り羽二重箴の製作法を尋ね傍ら桐生箴を輸入するの手續きをなす同年十一月福井縣物産陳列場内を借受け組合事務所を移転す同廿一年二月同業組合に於ては組入員を桐生足利及甲州地方に派し巡視せしむるの必要を感じ總會を紳宮教會場を開き議事を議定し派出員を選擧す富田循良岩村繁介當選す三月下旬に至り派出員歸福四月派出員報告會を慶福寺に開く同月組合員より建議者あり會議を開き規約を更正し而して認可を願出るも規約面輕疎不完全なるを以て認可ならず六月富田循良事實を具陳する虚像なき次第を以て聞置きとなり爾後三ヶ月を期し完全なる親約に更正すべき旨指令あるに従い直ちに規約修正會を開き終結を遂げ更に認可を受く同年羽二重製織家大に増殖し本市及森田松岡等の諸邑に及び濫造の弊將に大に興らんとす時に郡長柘植善吾と謀り郡役所の公用文を發し新機業家を招喚し組合加入を奨励す同月末の調査によれば組合員貳百六拾七名機數凡千五百有余台に至る

明治二十二年一月組合總會を佐佳技下町慶福寺に開き一部内毎に議員六名宛を選擧せしむ而して毎部の高点者を以て其部幹事とす同年三月絹織物組合規約を修正し富田循良を組長に推薦す時に組合員の數實に四百有余名に達し全縣下の機數貳千有余台の多さに達す斯くの如く機業大に勢を得羽二重の産額日に増し月に加ふるに至りたるを以て同年七月以來横濱輸送の目的を以て小會社を設く曰く一六社利厚社同盟社厚利社同益社精絹社松隆社友益社共益社等漸次續出せり今其由来を少し爰に述べん明治二十一年坪田源太郎を横濱に出張せしむるや三宅丞四郎竹谷米岡織工會社及山口喜平等其製品を取纏め毎月六回濱表へ輸送したるが其の一六の日に輸送したるを以て人呼んで一六社と稱せり（後一六の名を市録と改む）越て二十二年鈴木大吉の手代安藤嘉七開店せるを以て水野勇次郎島田熊太郎土田重永田重等共同して一社を設け名つけて利厚社と稱す同年小川坪田本莊等亦同盟社を設く故に一六社を以て羽二重會社の嚆矢とせざる可らず同年絹織物組合組長富田循良没するを以て竹下津一選はれて其後任者となる練業証紙を實行するに至りしは竹下の在任中に係る翌年小川喜三郎組長に推選せらる

以下引き続き掲載予定

第四期羽二重終成時代

取引組織の沿革

練白業の沿革

機具の沿革